

### はじめに...

1912 (大正元) 年7月30日の深夜0時43分、明治天皇崩御に伴い、新たな元号「大正」が始まった。

日本が近代国家としての立場を獲得し、列強各国と肩を並べるに至った怒涛の明治時代。その近代化の波を受け継ぐ大正時代は、現代社会の礎を築く上で最も重要な時代と言えよう。

新たな情報伝達の方法としてラジオが登場し、今まで貴族中心で行われてきた選挙制度に民間人も関わる事ができるようになった。また、民衆の力が強まることで、これまでの労働の在り方も見直されることになり、今の労働組合の基礎が出来上がったのも大正時代だ。

さらに、職業婦人と呼ばれる女性たちが社会に進出し、バスガイドやエレベーターガールなど、女性特有の職業が生ま

れたのもこの時代の特徴の一つだ。

他の時代と比較すると僅か15年しかなかった大正時代には、現代に生きる私たちの生活環境に通ずる事柄があふれている。また、昨今ブームの『鬼滅の刃』(吾峠呼世晴/著、集英社、ジャンプ・コミックス)では、作品の時代背景としても描かれている。方々で注目を集めるこの時代を振り返るにあたり、図書館資料を通して、様々な視点からこの時代を検証していこうと思う。



### 政治から学ぶ大正時代

元号「大正」は、中国儒教の経典『易经』に由来し、「民衆の言葉を受け入れ、正しいまつりごとが行われる」という願いが込められている。

元号についての詳細は、以前『シイビリア vol. 37』(2019年5月31日発行)でも特集しているので、ぜひそちらもお手に取っていただきたい。

1904 (明治37) 年に起きた日露戦争で勝利した日本は、朝鮮半島、樺太の南半分の利権を手に入れることに成功した。しかし、ロシア側から賠償金を得ることはできず、やむなく国民へ重税を強いることになり、それは大正時代まで続

いた。当時の政権は、伊藤博文の後継である西園寺公望と陸軍に所属していた桂太郎が交互に総理大臣を務めており「桂園時代」とも呼ばれていた。この二人による軍閥寄りかつ独占的な政権に、民衆は不満を募らせ、憲政擁護運動を引き起こす。そして1913 (大正2) 年2月10日、怒りを爆発させた国民が議会を包囲するまでに至り、その数は優に数万人を超えたとされている。この騒動により、翌2月11日、桂内閣は総辞職に追い込まれることとなる。この出来事は後に「大正政変」と呼ばれ、民衆の力が政権を覆したという歴史的に重要な最初の事例となった。これを契機に政治の根幹が見直され、現代にもつながる政党政治の基礎が生まれる。さらに、民主主義の発展による自由主義的な風潮が萌芽するきっかけともなった。

いた。当時の政権は、伊藤博文の後継である西園寺公望と陸軍に所属していた桂太郎が交互に総理大臣を務めており「桂園時代」とも呼ばれていた。この二人による軍閥寄りかつ独占的な政権に、民衆は不満を募らせ、憲政擁護運動を引き起こす。そして1913 (大正2) 年2月10日、怒りを爆発させた国民が議会を包囲するまでに至り、その数は優に数万人を超えたとされている。この騒動により、翌2月11日、桂内閣は総辞職に追い込まれることとなる。この出来事は後に「大正政変」と呼ばれ、民衆の力が政権を覆したという歴史的に重要な最初の事例となった。これを契機に政治の根幹が見直され、現代にもつながる政党政治の基礎が生まれる。さらに、民主主義の発展による自由主義的な風潮が萌芽するきっかけともなった。

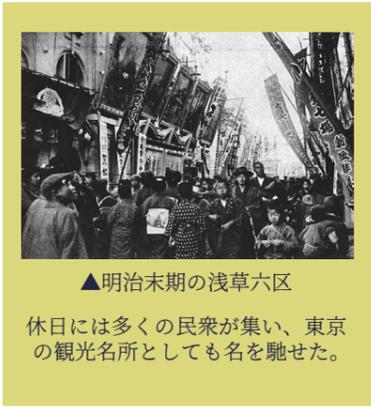
大正時代初期は、大衆文化がおおいに花開いた時期でもある。ラジオ放送がはじまり、週刊誌の創刊が全盛期を迎え、1915（大正4）年には日本初の地下鉄道も開通した。また、「大正デモクラシー」の動きが活性化し、民衆一人一人が自己の確立を意識し始めた転機でもあった。では、それらが発展した背景を見ていこう。

▼ラジオ放送

海外ではすでに選挙の結果発表やポロパガンダ的な目的で活用されていたが、日本で正式に公共機関を通してスタートしたのは1925（大正14）年3月22日のことだ。しかし非公式な放送は1923（大正12）年9月1日、関東大震災時点ですでにされていた。だが、その内容はデマばかりで情報と呼べるものは少なく、それに翻弄されて混乱が起きることもしばしばあったようだ。情報の取捨選択が求められる点は、現代社会と同じだろう。

▼食生活

1914（大正3）年、第一次世界大戦を皮切りに、日本は泥沼の戦争期へと突入する。当時、国内で生産される米の大半が軍用米に回されたため、国民へ充分な配分が行き届かなくなりました。これに対し国民は、米の配分をできるだけ国内に回すよう嘆願したが、これを当



▲明治末期の浅草六区  
休日には多くの民衆が集い、東京の観光名所としても名を馳せた。

・キネマ（映画）

当時は「活動写真」と呼ばれ、初めて日本で上映されたのは1896（明治29）年だと言われている。東京・浅草六区を中心に栄え、当初は、動く写真に字幕と活動弁士による場面の状況説明が加えられた無声映画が主流だった。

・オペラ

1912（大正元）年、イタリア人の演劇家ローシーが帝国劇場に招かれた。彼の門下生が中心となり、「浅草オペラ」が形成され、『アイダ』などの名作が上演された。田谷力三をはじめ、高木徳子など多くのスターが誕生し、「ペラゴロ」（※オペラ+ゴロツキの略）と呼ばれる熱狂的なファンも生まれた。



大正時代は、女性の躍進が著しい時代だ。これまでの女性像は、男性の一步後ろに控える…いわゆる良妻賢母が主流であり、第二次世界大戦以降も女性教育の

時の政権は撥ねつけた。そのため、国民は米の不当な移出を阻止すべく実力行使に動き出すほかなくなってしまう。結果、いわゆる米騒動と呼ばれる暴動が各地で多発するようになる。

現代では、朝食にパンを食べることが定着しているが、実はこの習慣が根付いた背景には、大正時代のシベリア出兵、ひいては第一次世界大戦が大きく関わっている。軍用米として不足する米に代わり、台頭したのが小麦だった。稲作より小麦の栽培が簡単だったことも理由の一つだろう。

**大正時代の創業ラッシュ!!**

戦争で外国製品の輸入が途絶えたことで、日本国内では重化学工業の需要が急速に高まった。それに伴い、日本各地で創業ブームが起こり、現代にも受け継がれる数多の技術が誕生した。

マコネーズの金字塔"キユーピー株式会社"や、長く国民に愛されているお菓子・グリコの"江崎グリコ株式会社"は有名だろう。

さらに、現代の電機メーカーを代表する"シャープ株式会社"やカメラブランドの"株式会社ニコン"、数多くの映画やドラマを発信する"日活株式会社"も大正時代に生まれた。

▼交通

日本で初めて鉄道が走ったのは、1872（明治5）年。その後、鉄道の国有化に伴い、大正時代を代表する国産蒸気機関車"8620形（通称・ハチロク）"が誕生した。そして、1914（大正3）年12月14日に竣工された東京駅の開業を経て、帝都の玄関口は華々

しい発展を遂げていく。その後、「日本の地下鉄の父」と呼ばれる早川徳次が、1920（大正9）年に東京地下鉄道株式会社を設立し、上野〜浅草間の開通に尽力した。

▼抒情画

今でいうイラストレーションの先駆けであり、「少女」をモチーフに描かれる絵画。明治時代に創刊された少女雑誌を発端とし、女性の自由や個性を重視する流れが生まれたことで、少女文化は近代的な成長を遂げる。出版業界も多分にもれずその波を受け、新たに女性向けの刊行物が多数出版された。その表紙を飾ったのが抒情画だ。多感な時期を生きる少女の精神面を描く芸術としての側面と、ファッション誌的な表現を併せもつ抒情画は、当時の少女たちを虜にした。主な画家に、大正ロマンを代表する絵師・竹久夢二と高島華宵が挙げられる。

▼百貨店（デパート）

「今日は帝劇、明日は三越」のキャッチフレーズをきいたことはあるだろうか？

1904（明治37）年に、三越が「デパートメントストア宣言」をしたことで、日本初のデパートが誕生した。百貨店はいずれも呉服屋から転業しており、1919（大正8）年には白木屋、松屋高島屋が、1924（大正13）年には伊勢丹が転身した。ファッション、メイクはもちろん、時代のニーズに即した日用品の販売や、レストランの設置など、数

基本理念として根付いていた。しかし、大正期を境に自立する女性が増え始めたのも事実だ。

代表的なのは、1911（明治44）年に発刊された雑誌『青鞥』の「元始、女性は大陽であった」の一文でも知られる平塚らいてうだ。本名・平塚明は、文芸と婦人運動に多大な影響を与え、これまでの女性の在り方に風穴を開けた人物でもあった。当初、『青鞥』は婦人向けの文芸誌として刊行されたが、徐々に婦人問題や女性の言論と思想の自由を主張する内容へと移行し、さらにその活動は婦人解放運動にまで発展する。かくして「新しい女」という言葉が生まれ、当時の流行語にもなったそうだ。

▼職業婦人の台頭

元祖キャリアウーマンと呼ばれる職業婦人は、大正時代におおいに活躍した。その背景には、企業側が安価で雇える労働力を求めたことや、戦後の不況により女性が働かざるを得ない状況であったことが挙げられるが、女性の自立のきっかけとなったことは確かだろう。

職業婦人とは、『日本労働年鑑』（大正10年刊行）において「多少の事務又は技術的能力を有する、被傭者および営業者として独特の地位を有する女子」と定義されている。いわゆるホワイトカラーの仕事にあたる、事務員や店員、医療などの専門職、女給などが該当し、肉体労働系の職業は含まれなかったのが特徴だ。男性と比較すると低賃金で簡単な仕事し

か任せられていなかったようだが、当時の雑誌や新聞で特集されるなど、職業婦人の存在は新時代の象徴として認知されていた。

▼モガ&モボ

大正末期に登場したモダン・ガール（通称・モガ）とモダン・ボーイ（通称・モボ）の存在は、大正ロマンを語る上で欠かせない。

断髪に洋服を着こなし、キリッと描いた眉につけぼくろ、爪に施されたマニキュア、時代の最先端を行くモダン・ガール。山高帽子にロイド眼鏡、セーラーパンツにステッキを翻すモダン・ボーイを連れ、銀座を颯爽と歩く彼女たちは、まさに「新しい女」の代表だった。

しかし、当時はまだ女性に対する良妻賢母の風潮が根強く残っていたため、彼女たちに向けられる視線は決して歓迎するものばかりではなかったことだろう。今こそ女性が活躍する時代になっているが、当時の日本では憧れと同時に嘲笑の対象であったことも否めない。



大正時代を振り返ると、現代との共通点がいくつもあることが分かる。しかし、当時と比較するとはるかに多くの選択肢が私たちには与えられている。

図書館は、現代の私たちと過去をつなぐ知識の社交場でもある。今特集で少しでもそれを感じていただけたら幸いです。

潜入!! 突撃・百貨店!!



白木屋呉服店 陳列棚

当時のデパートは土足厳禁で、スリッパに履き替えるのが常識だった。しかし1923（大正12）年、白木屋神戸店が土足による入店を実施したことで、大衆がデパートへ足を運びやすくなり、ショーウィンドウを自由に眺めながら気軽に買い物気分を味わえる"ウィンドーショッピング"が盛んに行われた。これを契機に、デパートの大衆化はよりいっそう進んだとされている。

多くの人々で賑わう「東京の新名所」として話題をさらった。行けば欲しいものがれの場所でもあったのだ。

▼エンターテインメント

大正ロマンスポットとも言える浅草は、明治から大正にかけて、民衆娯楽がもつとも盛んだった地区だ。「浅草寺」や「仲見世」を筆頭に、見世物小屋や大道芸で賑わう「浅草公園」、日本最古の遊園地「花やしき」などが軒を連ねる様子は、娯楽の殿堂と言っても過言ではないだろう。また、日本初のエレベーターが設置された12階建ての「凌霄閣」も目玉の一つだった。

衝撃!! 女学生の実態!!

ここで言う「女学生」とは、12〜17歳の少女を対象とした高等女学校生のことを指す。女学校は、一般教養から始まり、花嫁修業も兼ねた授業を学ぶ場であったが、その内容をひも解くと「え…そんなことまで…?」というようなことも多々見受けられる。

例えば、「家に泥棒が押し入った際の対処法」や「いい卵の見分け方は、眼球が生き生きとして肛門がよくひきしまった鶏が産んだものがよい」などがある。卵の選び方に関しては、もはや生きのいい鶏の選び方である。

参考文献

- 『ビジュアル大正クロニクル』（世界文化社、2012年、所蔵：中央）
- 『大正ロマン手帖』（石川桂子／編、河出書房新社、2009年、所蔵：中央）
- 『記録を記憶に残したい大正時代』（山口謠司／編著、徳間書房、2017年、所蔵：東中野）
- 『今じゃありえない 100年前のビックリ教科書』（福田智弘／著、実業之日本社、2017年、所蔵：南台・鷺宮）
- 『国立国会図書館 写真の中の明治・大正』

[http://www.ndl.go.jp/scenery\\_top](http://www.ndl.go.jp/scenery_top)